

復刻

# アメリカ映画

アメリカ映画研究所／編集（＝「キネマ旬報」同人）

第1号～第21号（1946年11月1日発行～1948年10月発行）



★ 総合監修：谷川建司 発売元：文生書院

第3回配本 (全2冊)	1～11号	1946年11月1日～1948年1月20日	計459頁	¥35,200 (¥32,000 税別) ISBN978-4-89253-653-9
	12～21号	1948年2月20日～1948年11月20日(終刊)	計440頁	

文生書院

〒113-0033 東京都文京区本郷6-14-7

電話 03-3811-1683 Fax 03-3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp

# 『アメリカ映画』解説

たにかわたけし  
谷川建司（早稲田大学）

占領政策が開始され、占領下日本におけるアメリカ映画の配給がセントラル・モーション・ピクチャ・エクスチェンジ（CMPE）によって一元的に行われる形がスタートしたのは昭和21年（1946年）2月28日のことで、最初の公開作品は『キューリー夫人』と『春の序曲』だった。CMPE設立のプランは、戦前の日本でコロンビア映画の極東支配人を務め、戦時中は合衆国政府の戦時情報局（OWI）のチーフ映画将校として戦後の占領地域における映画政策起案の中心的立場にいたマイケル・ベルゲルによって事前に立案され、国務省の承認を得てベルゲル自身が国務省から派遣される形で来日して実行に移された。―― 選択された優れたアメリカ映画を配給することを通じて日本人に民主主義的な価値観を植え付けることを建て前としていたCMPEは、それ故に占領政策の一翼を担う組織と見なされ、当初はGHQの民間情報教育局（CIE）の下部組織と位置付けられていた。

ソ連など他の連合国の映画の配給本数を制限し、アメリカ映画ばかりを日本人に大量投与するというGHQの政策は、当然ながら極東マーケットにおける優位を絶対的なものとしたアメリカの映画産業界の純粋に商業的な思惑と表裏一体だったが、日本の映画産業界（特に興行界、映画ジャーナリズム）はこの戦後の新しいトレンドに飛びつき、「アメリカ映画さえ上映すればお客が入る」との判断からCMPEと契約、「〇〇セントラル劇場」と改名してアメリカ映画上映館であることをアピールする劇場が増え、アメリカ映画を紹介する映画雑誌を新刊して読者を獲得しようという動きが活発化した。

老舗の映画雑誌『キネマ旬報』の別動隊としてアメリカ映画に特化した月刊誌『アメリカ映画』の刊行が飯島正を編集兼発行人（第三～第四号は早田秀雄、第五号からは堤昇が発行人で、第七号からは堤が編集人を兼務）の下で開始されたのは正しくそうした文脈においてであり、昭和21年11月号をもって創刊された。ちなみに、発行元はキネマ旬報社ではなく、便宜的にアメリカ映画研究所となっている。切り良く昭和22年1月号からとせず、前年末にスタートさせたのは占領期にはよくある手法で、創刊号はVol.1. No.1として、第二号（昭和22年新年号）はもうVol.2. No.1ということになり、長く続いている雑誌のように見せかける常套手段だった。

創刊号の執筆陣は飯島正、清水俊二、双葉十三郎、植草甚一、野口久光（以上は同人）、南部圭之助、清水千代太、淀川長治という鉄壁の陣容で、ほかに東宝創業社長の小林一三、朝日新聞の中野五郎、東和商事の川喜多かしこによる「アメリカ映画の愉しさ」と題されたコラムも掲載され、表紙デザインは東和配給作品のポスターで知られる野口久光が担当するという豪華さだった。その後の執筆陣を見ると、飯田心美、筈見恒夫、上野一郎、岡俊雄といった戦後日本の映画ジャーナリズムを牽引していく顔ぶれに加えて、ハリウッドで活躍した撮影監督の三村明、字幕翻訳者の草分けであった田村幸彦、戦前にアメリカの大学や議会図書館に勤務した経験を持つ女性評論家の坂西志保、『リーダーズ・ダイジェスト』日本語版編集長の鈴木文史朗、英米文学者の中野好夫、美術評論家の瀧口修造といった名前が目立つ。淀川長治や田村幸彦は当時CMPEに勤務していたし、双葉十三郎、鈴木文史朗、中野好夫はCMPEの肝いりで

設立された「アメリカ映画文化協会」に委嘱されたアメリカ映画鑑賞指導委員だった。つまり、『アメリカ映画』は、GHQやCMPEにとって最も役に立つ日本の知識人たちによって、「アメリカ映画によって日本人を民主化する」という目的を円滑に遂行していくための媒体として機能していたのである。

例えば、占領下日本の状況に鑑みて特にCMPEが力を入れていた作品は同誌においても大きく扱われている事が判る。具体的には、昭和22年（1947年）7月の第六号では、前年12月に公開された『感激の町』（戦前に公開された『少年の町』の続編で、孤児となり非行に走る少年たちを保護し更生させる物語）の主人公のモデルで、ダグラス・マッカーサー元帥が占領下日本の孤児対策への助言を請う為に招聘し来日していたエドワード・J・フラガナン神父による読者へのメッセージが掲載されている。また、昭和23年（1948年）7月の第十七号では、6月公開の『我等の生涯の最良の年』（アカデミー作品賞受賞作で、心身ともに傷ついた帰還兵を社会が温かく迎え入れる様を描く）を七名の執筆陣が合評（座談会）で取り上げている。浮浪児対策も、傷痕軍人問題も当時の日本が抱えていた大きな問題であり、アメリカ映画を通じてその問題解決へのヒントが提示されていた訳である。第六号にはまた、CMPE製作部長だった田村幸彦による「アメリカ映画業界特信」に加えて、同じくCMPEの職員だったアルベックによる「映画館の民主化へ どうぞ手紙を出して下さい」と題したエッセイが掲載されている。こうした、読者とCMPEを結びつける試みが行われている点などを見ても、『アメリカ映画』には明らかにCMPEにとってのアンテナの役割が付与されており、一介の映画雑誌でありながらアメリカの対日映画政策と軌を一にしていた側面を感じずにはいられない。



# 【復刻版】占領期を中心とした『キネマ旬報』後継誌

## 既刊『キネマ旬報 再建号』（キネマ旬報社）

第1号～第79号（1946年3月1日発行～1950年4月1日発行）まで

キネマ旬報社内の集合離散のため、戦後刊行の『キネマ旬報』の号数にカウントされていない幻の号。

第1回配本 （全3冊）	1～10号	1946年3月1日～1947年2月10日	計476頁	¥51,150（¥46,500 税別） ISBN978-4-89253-626-7
	11～24号	1947年3月1日～1947年12月1日	計538頁	
	25～36号	1948年1月1日～1948年6月15日	計536頁	
第2回配本 （全4冊）	37～48号	1948年7月1日～1948年12月15日	計624頁	¥76,450（¥69,500 税別） ISBN978-4-89253-627-4
	49～60号	1949年1月1日～1949年6月15日	計562頁	
	61～72号	1949年7月1日～1949年12月15日	計618頁	
	73～79号	1950年1月1日～1950年4月1日	計520頁	

## 既刊『映画新報』（映画新報社）

第1号～第25号（1950年8月1日発行～1952年3月15日発行）まで

田中三郎が発行編集人として刊行。

第4回配本 （全2冊）	1～10号	1950年8月1日～1951年3月1日	計574頁	¥42,350（¥38,500 税別） ISBN978-4-89253-640-9
	11～25号	1951年4月1日～1952年3月15日	計518頁	

## 『映画春秋』（映画春秋社／編集＝「キネマ旬報」同人）

第1号～第34号（1946年8月1日発行～1950年4月10日発行）まで

キネマ旬報から派生した映画論壇誌。

第5回配本 （全3冊）	1～5号	1946年8月15日～1947年3月15日	計430頁	¥46,200（¥42,000 税別） ISBN 978-4-89253-646-5
	6～11号	1947年4月15日～1948年2月10日	計490頁	
	12～18号	1948年3月10日～1948年9月10日	計476頁	
第6回配本 （全3冊）	19～25号	1948年10月10日～1949年7月10日	計548頁	¥51,150（¥46,500 税別） ISBN 978-4-89253-647-2
	26～30号	1949年7月10日～1949年12月10日	計512頁	
	31～34号	1950年1月10日～1950年4月10日	計476頁	

★原本の状態等で、価格が変更になる可能性があります。